〔毛吹草三〕近江　葛籠笠（ツヅラガサ）

〔懐硯一〕二王門の網

面白おかしき法師、○中略名は伴山と呼べど僧にもあらず、俗にも見えず、○中略草鞋に石高なる京の道を踏出しに、更に張笠の上に音なして、降り續きたる五月雨、○下略

〔和漢三才圖會二十六服玩具〕菅笠○中略

塗笠　用薄片板紙張之、漆黑色、出於京師及大坂、

〔我衣〕眞鍮鋲ヲ打慶長前ヨリ經木ヲ以テ作ル、上紙ヲ澀張ニシテ、タメニ塗テ、上方ヨリ下ル、僧ノ笠也、道心者ハ不許冠事、○略圖

元文元年ヨリ經木笠ヲ杉形ニ作ル、平人ノ冠リモノトス、澀張塗止メ、兩面ニシテキレイナリ、タメヌリ、黑、青シツ、或黃アリ、上方ヨリ來ル、同時ニ上方ヨリ網代ノ杉ナリ、白地多ク、又赤ク澀ニテハキ、ウルシドメ、平人カムル、○略圖

前ニ云經木ノヌリ笠、寛永時代若キ女カムル、万治以來老母計リカムル、小兒笠ハ小ブリニシテ、内ニ菊、ボタン、梅椿、水仙、キヽヤウ、カキツバタ等ノ摸樣、彩色ニカキタリ、子供笠ハ、紅淺ギノヒモ引トヲシ上ニテ結ブ、寛永ノ比、若女ノカムリシ時ハ引通シタリ、

〔骨董集上編中〕女の編笠　塗笠

婦女の編笠塗笠をかぶりしはいと古きことなり、古き繪卷などにあまた見えたり、近古も女は面をあらはすを恥とし、道を行に深き笠を戴き、又は覆面などしたり、賤の女も面をあらはにしてありきしはまれなり、寛文の比までは、女の編笠塗笠いと深くて、少しも面をあらはす事なし、寛文二年の印本、江戸名所記などの繪を見ても考へおもふべし、○中略貞享の比より塗笠はやゝすたれる歟、○中略